第四章私の考へる「教育・学問の意義と理想」

■教育の基本は親子の交はり

“教育”と言へば、今はたいていの人がこれを“学校”のものと考へてゐます。それほど“教育”は今は“学校”におんぶしてゐる所が多いのです。しかし、教育はもともとは家庭のものでした。

“教”といふ字は、旧字体では“教”であり、さらに古くは𡥈でした。つくりの“𠂇”はボクニョウと呼ばれ、「手に物を持った形」を表したものですが、この字の古い形の“𠂇”は“父”といふ字の古い形と全く同じ形をしてゐます。

“××”は「物が交はった形」を表した符号で“交はる”といふ意味を表してゐるから、“××”と“子”と“父”とから成る“教”は「父と子と交はること」を表した文字であると考へられます。昔は、たいていの家が、住居であると同時に仕事場でもありました。ですから、子供はいつも父親の傍（かたわ）らに遊んでゐて、父親のする仕事を見ながら生長して行きました。長ずるに従ひ、仕事をする父親の一挙手一投足を見様見真似（まね）でやってみて、それが家業を継ぐための腕を磨く“教育”だったのであります。

さて、“教育”は、うける者の立場から言へば“学習”となります。今、“学”といふ字を“まなぶ”と訓（よ）んでゐますが、古語では“まねぶ”と訓んでゐました。“まねぶ”とは“真似ぶ”とも書き、それは今の“真似る”ことです。ですから、「親のする事を見て真似る」ことが“学ぶ”ことの本義であり、“教育”の原点なのです。

ついでに言ひますと、“学習”の“習”は、“羽”と“白”とから成ってゐますが、この“白”は今の“百”といふ字の古い形です。つまり、“白”といふ字は、“白い”といふ意味と、数字の“百”といふ意味とを兼ねてゐたのです。後に、この二つを区別するために、数の方は数字の“一”を加へて“百”としたものです。

だから、“習”の“白”は本当は“百”なのです。卵から孵(かえ)った雛が親鳥の羽ばたくのを真似て羽ばたくのが“学”ですが、それを百回も二百回もくり返して羽ばたくことが“習”といふことなのです。雛鳥は“学”だけでは決して飛べるやうにはなりません。飛べるやうになるのは“習”の結果です。“学”だけでは能力は育たないのです。“学”は“習”を重ねて始めてその価値を高めるのです。

私は今の学校教育を観てつくづくと思ふのですが、学校教育には“学”があるだけで、肝腎の“習”が無いのです。これでは能力が育つわけがありません。頭の働きの俊敏な子供には可能であっても、普通の子供やそれ以下の子供には到底出来ることではありません。「今の中学生の七割は落ちこぼれてゐる」と言はれてゐますが、それは当然の帰結でせう。

昔は、十分とは言へないまでも“習”がありました。「読書百遍、意自ら通ず」と言はれてゐて、子供たちは皆、書物をくり返しくり返し読まされたものです。それは学校においてだけではなく、家に帰ってからも子供たちはくり返しくり返し書物を読んだものです。ですから、たいていの子供が小学校だけで世に出ましたが、それでも今の大学生よりも確かな読み書き能力を身につけてゐたものです。

■学校不信の時代に

今、学校不信の声が高いやうですが、学校教育では能力が養へないことを親たちがよく知ってゐます。その能力が養へない理由には、今の教師からが昔の教師たちよりも能力が低く意欲にも欠けてゐることもありますが、その最も大きな理由は、“学”だけがあって“習”が無いといふことにあるのです。

学校不信の声に反して“学習塾”の評判が良いのは、文字通り“学”と“習”とが並び行はれてゐて、そのため能力が育つからでせう。論語の冒頭に「学びて時にこれを習ふ。また悦(よろこ)ばしからずや」とあります。「学んでこれを習ふ」から、それまで出来なかった事が出来るやうになるので、だから「それが何とも喜ばしい」といふのです。

今ほど教育の重要性が叫ばれ、その方法が論ぜられてゐる時代はないでせう。しかし、「船頭多くして船山に上る」で、教育が声高に論ぜられれば論ぜられるほど、枝葉末節に走ってその実が無いやうです。今こそ教育の原点に立ち戻って、そこから考へ直すべき時であると思ひます。

ところで、私は本書を“歴史的かなづかひ”に拠って書いてきました。そもそも“かなづかひ”とは、かな文字の使ひ方の約束であって、それは過去から現在、未来にわたって通ずるものでなければならない、と考へるからです。

例へば、英語の“one”といふ綴りを御覧頂きたいのですが、ウァンといふ発音とは思へない綴りです。それもそのはず、この綴りは十六世紀におけるオウニーといふ発音を表したものなのです。この言葉はオウンと変り、ウォウンと変り、今はウァンと発音します。言葉は変りましたが、綴りは変へなかったのです。ですから、十六世紀の書物が今でも読めて解るのです。もしも綴りを発音通りに書くやうに変へてゐたら、とても読めたものではありません。

戦後、国語審議会は“歴史的かなづかひ”は難しいからといふ理由で“現代かなづかい”に変へました。「難しくても必要なら何としてでも出来るやうに教へる」のが教育といふものです。国語審議会の取った態度は全く非教育的なものでした。

幸ひ今の国語審議会は“歴史的かなづかひ”の重変性を認め、その学習を励めてゐます。しかし、世の中にその手本が少ない現在、その学習は至って困難です。世の人々に

少しでも“歴史的かなづかひ”に慣れて頂きたいといふ思ひでこれに拠った書き方をする次第です。

■天才少女を育てた或るアメリカの家庭

私は「教育は、本来は家庭のものである」と述べました。零細（れいさい）な家内手工業が、産業革命により、機械工場による大量生産方式に取って換られたやうに、個人的な家庭教育が集団的一斉指導の教育に取って換られたのです。

学校教育は、「教育を専門とする教師が、一人で大勢の子供たちをまとめて一斉に指導できる」といふ点にその特長があります。一人の教師が大勢の子供たちを一斉に指導できるのですから、それは丁度「工場の機械による大量生息」のやうに、その効率には非常に高いものがあります。

しかし、今でも、高級品はやはり職人の手による「家内手工業」に依らなければ出来ないやうに、個性豊かな真に人間らしい人間は、とても学校教育の能（よ）くする所ではありません。それは家庭教育の中で初めて育成されるものです。昔の人は「三つ子の魂、百までも」と言ひました。人間の最も大事な基礎は“家庭”で作られるといふことは、昔から広く認められてゐたのです。

平成三年五月二十九日発行の AERA 誌に「ハーバード大学で数学を教へる十八歳の少女」といふ記事が掲載されてゐました。その少女の名前は、ルース・ローレンスと言ひましたが、彼女は十二歳でオクスフォード大学の入試に合格して入学し、普通なら三年かかる所を二年在学しただけで卒業したのです。しかも、その成績はトップだったのです。そして、十七歳で数学の博士号を取得、アメリカ一の名門ハーバード大学に迎へら

れたのです。

彼女は大学に入るまでは、学校といふものには一切行ってゐないのです。すべて家庭で、父親から教育を受けたのです。彼女の父親は、「学校はいろいろな子供が集まってゐて、結局、一人一人の個性を薄めてしまふ所だ」と考へてゐましたので、彼女を学校に行かせずに、自分で教育しようと決心しました。それで勤めをやめて、妻に働きに出てもらひ、自分は“家事”と“教育”とに専念したのです。

彼女の父親は「学校は子供の個性を薄めてしまふ所だ」と言ってゐますが、私は「学校は子供の個性を押しつぶしてしまふ所だ」と言ひたいくらゐです。教師のほとんどが、個性のある、独創性の豊かな子供を受け入れないどころか、ひどく嫌って問題児扱いをするからです。

■個性が伸ばせない学校教育

発明王エヂソンも、その強い個性のために受け持ちの教師からひどく嫌はれ、どうしようもない問題児であるといふ評価を受けました。それで、母親が家庭で彼を教育し、そのお蔭で彼の個性は損(そこな)はれずに伸ばすことが出来、世界一の発明王になれたのです。

学校といふ所は、このやうに強い個性のある子供を受け容れない所ですから、エヂソンのやうに個性の強い子供は学校に行かせないで、家庭で教育した方が良いのです。アメリカには、それが出来る自由があるから良いのですが、日本にはその自由がないから困ります。学校へ行かないでゐると、「登校拒否児」といふ烙印を押され、非行少年少女の扱ひを受け、その将来を鎖(とざ)されてしまふ恐れがあります。

欧米諸国の良い所は、ルース・ローレンスのやうに、能力さへあれば十二歳でも大学に入ることが出来、しかも、普通なら三年かかる所を二年間で済ますことも出来るやうになってゐることです。ですから、学校が個性をつぶすとしても、その害は日本ほどひどくなくて済むはずです。

ところがわが国では、どんなに高い学力があっても、十八歳にならないと大学を受験することが出来ません。ですから、当然の事ながら大学に入ることが出来ません。従って、どんなに能力が高くてもその能力に応じた学問を進めて行くことが出来ず、言はば“足踏み”をさせられることになるのです。これでは、折角伸びようとしてゐる「学問に対する情熱」も冷めてしまふでせう。これが、わが国に世界的な発明発見が少ない理由だと私は思ってゐます。江崎玲於奈氏や広中平祐氏のやうに、アメリカの自由な社会で研究することの出来た人たちの中には世界的な発明発見をしてゐる人がゐる所を見れば、日本人にも発明発見の資質が無いわけでは無いことが判ります。

私は、人間らしい人間とは個性豊かな人間のことだと思ひます。個性の無い人間など面白くないし、人間社会にとっても価値が乏しいのではないでせうか。“教育”とはその人の個性を伸ばすことに力を貸すことであり、それは親から子へと受け渡されるものであり、代を重ねるに従って発展させて行くべきものだ、と思ひます。だから、“教育”は「親と子の交はり」にその原点があり、そこから始まるのです。

■三つ子の魂、百まで

わが国の古い諺に「三つ子の魂、百まで」といふ諺（ことわざ）があります。“三つ子”とは、今では一般に“幼児”の意味に使はれてゐて、この諺の意味は「幼い時に身についた性質は一

生変らない」といふ意味です。しかし、“三つ子”とは、本来は“三歳の子供”といふ意味の言葉です。実は、近年著しい発達を遂げた大脳生理学では、「三歳といふ時期は、一生のうちでも特に重大な意味のある時期である」といふことを明らかにしてゐます。それで私は、この諺の“三つ子”を文字通り“三歳児”と解釈したいと思ひます。

そもそも人間が他のいかなる動物とも非常に異ってゐる点は“大脳”であります。大脳は、記憶・理解・認識・創造など、人間特有の精神活動を司る所であり、人間の頭脳の中ではずば抜けて大きな脳である所から“大脳”と呼ばれたものです。しかし、それは人間だけが大きいのであって、他の動物では高等動物でも小さく、下等動物に至っては小脳はあっても大脳は無いものがあります。だから、「人間の人間たる所以は大脳の働きにある」と言ふことが出来ると思ひます。

この“大脳”は、生れたばかりの時にはほとんど未完成の状態にあって、環境から刺戟（しげき）を受け取り、これに反応することによって発達して行くものである、といふことが今は明らかにされてゐます。しかし、二十年間にわたる大脳の発達は一様なものではなく、生後の三年間の発達がとりわけ著しく、その六〇～七〇パーセントまでが三歳までに出来上るといふことです。その後、十歳位までに九五パーセントが出来上り、あとは極めて徐々に徐々に成熟に向ひ、二十歳で一〇〇パーセントに達するのです。

つまり、人間は生れて三歳までの間に、その人の精神活動を司る大脳の大半が出来上るのですから、「三つ子の魂、百まで」といふ昔の諺は、最新の科学に照しても真理を衝いた諺であるといふことが出来ませう。そして一生のうちで最も大切な三歳までの間の教育は、学校教育の盛んな現代でもやはりその大部分が家庭で行はれてゐることを考へ合はせると、形の上では今でも「一生のうちで最も重要な時期の教育は家庭で行はれてゐる」といふことになるのです。ただ、現実には、今の家庭はその実を失って居

り、しかもその自覚が無いのです。そこに問題があります。

■良い子、悪い子は家庭で決まる！

さて現代ほど“学校教育”の重要さを説く時代はないと思ひます。誰でも口を開けばその重要さを説きますが、徒(いたず)らに重要だと言ふだけで、実際には何もしないのが実情です。教育は、教師や学校施設の充実よりも、各家庭が家庭教育の重大さを認識し、自らわが子のより良い生長に直接関与しようといふ姿勢の方がずっと大切なのです。

どんなに立派な学校でも、良い子もゐれば悪い子もゐるのが実情です。どんなに有能な教師でも、悪い子供を立派な子供に育てることは困難です。それはすでに学校に就学する以前に、それぞれの家庭の良し悪しにより、その子供の性格や能力がほぼ形成されてゐて、その影響を強く受けるからです。

昭和四十八年、私は八王子市に教育研究所を創り、そこに幼児教室を設けました。ここでは六人の三歳児を一組にして指導するシステムでしたが、組によっては六人の間に著しい格差があって、一斉指導に困難なものがありました。幼児は僅か三年間の家庭教育の違ひによってこれほどの格差がつくのです。私はこの格差を観て、「三つ子の魂、百まで」といふのは真理だとつくづく思ひました。このやうに三歳までの幼児の環境と教育の良し悪しは、その子のその後の一生を左右するものですから非常に大切な問題です。

このやうに六人が六様で、子供の性格や能力に違ひがあるのですが、それが実はその母親に生き写しである場合が多いのです。前に「学習の“学”は“まねぶ”と訓(よ)み、“真

似る"ことである」と述べましたが、"真似る"ことは人間にも他の動物にも、皆生長に必要な本能として、生れながら身に備はってゐて、とりわけその親を真似せずにはゐられないからです。顔つきや体格が親に似るのは遺伝の所為（せい）ですが、話し方や立ち居ふるまひが似てゐるのは、子供が毎日朝から晩まで親の話し方や立ち居ふるまひを見聞きしてゐて、これを"真似る"からなのです。これは遺伝に因るものではありません。さういふわけで、立派な親の子供はたいてい立派であり、だめな親の子供はだめな場合が多いのです。それで、「蛙の子は蛙」と言はれてゐるわけです。

■とんびが鷹を生む

「蛙の子は蛙」といふ諺に対して、「とんびが鷹を生む」といふ諺もあります。それはどう考へたら良いものでせうか。それは「前者は世の普遍的な原則を言ったものであり、後者はその特殊な例外を言ったものである」と考へたら良いと思ひます。どんなに普遍的な原則でも例外の無い原則など無いからです。

それにしても、どんな場合に「とんびが鷹を生む」ものでせうか。それは「親が、子供の目の届く範囲においては、極力自重自戒して、立派なお手本を子供に見せるやう努力した場合」といふことが、先づ第一として考へられます。

九歳でライプチッヒ大学に入学し、十三歳には数学で博士号を取得し、十五歳では法学博士になり、十六歳でベルリン大学の教授になったカール・ヴィッテの両親の場合が、その典型的な例でせう。

しかしながら、あのやうな努力はとても普通の人間の出来ることでは無いでせう。

――だから「とんびが鷹を生む」といふことは例外中の例外だと言ふわけです。――と

は言っても、「わが子には親よりも立派な人間になってもらひたい」と願はない親はゐないし、さう願ふ以上はいささかなりともそのための努力をするのが親の務めといふものでせう。さういふ中から、異常な努力をするカール・ヴィッテの両親のやうな親が現れて、それで「とんびが鷹を生む」といふ特殊な例外が実現するのでせう。

第二として考へられることは、「"反面教師"が成功した場合」です。子は幼いうちは、無批判に親のすることを真似するけれども、やがて親の批判が出来る能力をもつやうになります。さうなると、悪い親の醜い行為を見ても、自分はあのやうな醜い行為は絶対にしないぞと覚悟し、かつその努力をする者もあります。その場合に「とんびが鷹を生んだ」といふ結果になるでせう。

■偽善の奨(すす)め

しかし、このやうな例が極めて稀であることは、第一の場合と全く同様でせう。やはり「蛙の子は蛙」で、子は親に似るのが自然です。だから、私はかねてから「親は子供の目の前では、出来る限り立派なお手本を見せるやう努力すべきである」と世の親たちに訴へて来ました。私はこれを名づけて「偽善の奨め」と言ひます。

かう言ふと「偽善とは善くないことではないか」と反問されるでせう。しかし、私は「偽善こそ人間にふさはしい行為である」と考へてゐます。なぜなら、大聖孔子は「七十にして心の欲する所に従へども矩(のり)をこえず」とおっしやってゐます。大聖人でも、その晩年にやっと自然にふるまっても逸脱することの無い境地に到達し得たのです。我々如き凡人が、どうして努力しないで善が行ひ得ませう。

この「努力して行ふ善」が“偽善”なのです。“偽”とは“人為”といふ二字を一字につづめた字であって、それは“自然”に対する概念を表したものです。「小人閑居すれば不善をなし、至らざる所無し」と言はれてゐますやうに、人間は心の趣くままにしてゐたら、とんでもない事をしかねないものです。だから、私たちは事あるごとにわが身を反省し努力して、善を為すやうに心掛けなければならないのです。このやうに努力して行ふ善は「人為の善」ですから、私はこれを“偽善”と言ふのです。

“偽”が“自然”に対する概念であるやうに、“文化”といふ言葉も“自然”に対する概念であります。“文化”といふ言葉は“カルチャー”の翻訳語であって、それは本来は“耕作”を意味する言葉です。ありのままなる“自然”の中から穀物を収穫するのに対して、汗を流して“耕作”し穀物を収穫する。これが“カルチャー”であり、“文化”の本義です。つまり、“文化”とは“人為”の所産に外ならないのです。とすれば、「偽善を行ふ人こそ真の文化人」と言ふことが出来ませう。

私が敢えてこのやうなことを論ずるわけは、今の親たちの多くが「努力して良い手本を子供に示す」態度をもたないからです。「ありのままの親の姿を子供に見せること」が潔（いさぎよ）いことであり、「自分を良く見せようとする“偽善”は卑劣である」と思ひ違ひをしてゐるやうに思はれるからです。

私自身について言へば、子供たちに良い手本を見せるべくかなりの努力をしたつもりではあっても、これを私の記憶にある亡き両親と比較してみる時、遥かに努力が足りなかったことを思ひ知らされて、子供たちに済まなかったといふ思ひに駆られます。

思へば昔の親たちは皆偉かったのです。それは、生活が大変だったから常に真剣に努力せざるを得なかった所為（せい）かも知れません。朝暗いうちから起き、夜晩くまで真剣に働く親の姿は、子供にとってこの上無い良い手本でした。

■“勉強”と“学習”は全然違ふ

私たちは“学習”といふ言葉と“勉強”といふ言葉とをよく同じ意味の言葉として使ってゐますが、いやしくも教育に当る者はこの二つの言葉を峻別して使ふ必要があります。

“学習”が、論語の「学びて時にこれを習ふ。また悦ばしからずや」に由来する言葉であるといふことは既に述べました。“学習”とは心の奥底から湧き出る欲求に従ひ、読書や体験によって知識を吸収すると共に、練習を必要とする技芸はこれを十分に練習して、それまで理解できなかった事を理解できるやうにし、実践できなかった事を実践できるやうにすることでして、さうすると心の中が自然と何とも言へない喜びに満ち溢れてくるものなのです。

“学習”が「何とかして知りたい」といふ強い欲求から進んでせずにはゐられない読書や見聞であるのに対して、“勉強”は、課せられ責められて、仕方なしに行ふ読書や見聞のことです。“勉”といふ字は、“免責”の“免(まぬがれる)”と、“努力”の意味をもつ“力(つとめる)”とを組合せて作られた字で、「課せられた学業を果たすため(つまり、責任を免れるため)に努力すること」を表した字なのです。“勉強”は、この“勉”に「強ひる(いやだけれども我慢して行ふ)」といふ意味の“強”を加へて作った言葉です。

だから、“学習”してゐる姿と、“勉強”してゐる姿とは、外から見る限り、全く同じ事をしてゐるやうに見えて、区別がつかないけれども、両者の心中には雲泥の相違があるのです。

“学習”は自ら求めて努力するものですから、希望や期待からやる気が充満してゐて、楽しい気持が伴ふけれども、“勉強”は親や教師に命ぜられて仕方なくいやいやな

がらするものですから、唯ただ苦しいだけなのです。

■“自ら求める”やうな動機づけを

然し、それよりも問題なのは、“学習”はその効果が大きく著しいのに比較して、“勉強”はその効果が乏しいことです。同じ時間、同じ努力をしても、その効果が著しく違ふのです。だから、教育は、「課してやらせる」ことはすべきでないのです。「学習者が自ら求めて学習するやうに動機づけをしてやる」ことが必要です。

それは「課してやらせる」ことよりも難しい事であって、それこそ大変な仕事だと思はれるかも知れません。然し、よく考へて戴ければ解りますが「課してやらせる」ことよりも頭を使ふ仕事だからこそ、教育に任ずる者にとって実にやり甲斐のある楽しい仕事になるのです。とりわけ、こちらの計画通りに学習者が動いてくれた場合には、そのために払った苦労が大きければ大きいほど、そこから得られる喜びは大きいものになるはずです。

それに幸か不幸か、子供は好奇心の塊みたいなものですから、こちらから特別の工夫をしなくても、子供の方からどんどんと学習の動機を提供してくれるものです。一寸（ちょっと）した事にも疑問を抱き、うるさいほど質問して来るものです。だから、親や教師が一寸工夫をするだけで、子供は読書や技芸の練習に熱中して止まる所を知らないやうになるのです。

森敦氏が書いた幼児期の思ひ出でしたか、こんな話がありました。仲間が皆新しい制服を着てモダンな幼稚園に通ってゐるのに、自分だけ白髪の老人がただ一人で指導してゐる古ぼけた漢文の学習塾に通はされ、何とも面白くない顔をして帰宅すると、

母親が「お母さんはねえ、論語って全く読めないの。お母さんに読んで教へてくれる？」と言ったのださうです。

この母親の一言で、それまで沈んでゐた気持がいっぺんに吹き飛んでしまひ、「何だ。お母さんは論語が読めないの。ぢゃあ、僕が教へて上げる」といふわけで、得意になって「子曰く、学びて時にこれを習ふ。また悦ばしからずや。……」と、たった今習って来たばかりの論語を朗々と読み、それからは毎日喜んでこの塾に通ふやうになった、といふことです。

子供ってこんなものでせう。親の一寸した一言が、沈んでゐる子供の心をいっぺんに晴らし、それまで「つまらないこと」「いやなもの」と思ってゐた事が、「楽しくてたまらないこと」に一変してしまふのです。だから、親としてこれほど楽しく、かつやり甲斐を覚える仕事は他に少ないのではないでせうか。

先に紹介したルース・ローレンス嬢の父親が勤めを罷（や）めて子供の教育に専念したといふのも、このやうな楽しみとやり甲斐があったからでは無かったかと思ひます。このやうな教育は、今の日本ではとても奨められるものではありませんが、かういふ生き方も、それが成功するしないに拘らず、一つや二つはぜひあって欲しいものだ、と私は思ってゐます。

■自ら求めて獲得した知識こそが本物

既に述べましたやうに、“教育”の“教”といふ字は「父と子との交はり」を表した字であり、故に「子が親を見習ふ“学習”が“教”といふ字の本流である」といふことを重ねて強調して置きたいと思ひます。

つまり、教育は「親もしくは教師が子供を“教へる”こと」と考へ易いのですが、“教へる”ことは教育の本旨ではないのです。“自学自習”することが本旨なのです。論語にも「憤せざれば啓せず、悱せざれば発せず（自学してあと一歩といふ所で理解しかねてゐる、といふ状態にまで至ってゐない場合には“啓発”、つまり教へてはやらない）」とあるやうに、大教育者たる孔子は、自学自習してどうしても解決できない場合に限り、“教へる”ことをしたのです。

教へられて得た知識といふものは、よく解ったやうに思へても、いざそれを人に説明しようといふことになると、いかにその理解が不十分なものであったかといふことを思ひ知らされるものです。自学自習して獲得した知識とはその点が違ひます。

ではなぜ違ふかといひますと、自ら求めて得た知識といふものは、自分の頭を使って一歩一歩確実に理解を進めて行って到達したものですから、その過程がすべて明瞭になってゐるのです。だから、知識の全体が一本の筋道にまとめられてゐて、それが頭にしっかりと記憶されてゐるので、いつでも取り出すことが出来るのです。

所が、教へられて得た知識は、その時はすべてがよく理解できたやうに思へても、実は所所に空白の部分があるもので、その空白があることに気が付かないものだから、すべて理解できたつもりでゐるのに過ぎたいのです。それで説明しようといふ段になって説明できないと、忘れてしまったと思ふやうですが、実は説明できないのは初めからその部分が空白で、完全な知識になってゐなかったせいであることが多いのです。

自分で捜し捜し歩いた道はよく覚えてゐるが、人に導かれて歩いた道は覚えてゐないのが普通です。それによく似てゐます。このやうに、自ら求めて獲得した知識こそ真の知識であって、人生に役立つものであるが、教へられて得た知識は真の知識とは言ひ難く、「生兵法は怪我のもと」とやらで役立つどころか失敗のもとになりかねませ

ん。

生れつき脚の丈夫な者でも、脚を使はないでゐたら必ず脚が弱くなります。その反対に、生れつき脚が弱くても、毎日歩くことに努めてゐれば必ず脚が強くなるでせう。頭だって同じことです。いくら良い頭だって使はないでゐたら次第に頭の回きが悪くなるでせう。その反対に、悪い頭でもよく使へば次第に働きの良い頭になって行くはずです。

「頭を使ふ」とは「思考する」ことです。論語に「学びて思はざれば則ちくらし。思ひて学ばざれば則ちあやふし」とあります。孔子の言葉です。折角学習して知識を豊かにしても、頭を使って考へることをしないと働きの良い頭にならない、さうかと言ってただ考へるだけで学習しないと、常識の無い役立たずの人間になってしまふ、といふ意味です。

要は「学習し思考する」ことです。自ら求めて学習し思考することが教育の原点です。『大学』に曰く「誠にこれを求めば中(あた)らずといへども遠からず」と。

■世襲された職業の重み

今から二〇年ほど昔、イタリヤを旅行した時の事です。同行の友人から靴を買ふのにぜひ付き合ってくれと言はれ、一緒に靴屋を訪ねました。靴屋の主人は友人の足の寸法を測り、靴の型の希望を聞くと、山のやうに積まれた箱の中から一足の靴を取り出して来て友人に示したのです。友人はその靴が大層気に入った様子で、いそいそと片方の足を入れてみるや「これはいい。足にぴったりだ。この靴を貰ふ」と言ひました。すると靴屋の主人は「両足とも履いてみないといけない」と言ふ。そこで友人は両足に靴を履

いて二、三歩歩いてみたが、靴屋の主人は友人を椅子に掛けさせるとそこにしゃがみ込み、友人の足を靴の上からあちこち何度となく押したり撫でたりしてゐたが、順を横に振って「これは足に合ってゐない」と言ふのです。

友人は「いや。よく合ってゐる。この靴を貰ふよ」と言ったのですが、主人は聞き入れません。そしてまた箱の山を一つ一つ丹念に調べ、別の一足を取り出して来て友人に履(は)き換へさせました。すると友人は「ああこの方がいい。まるで足に吸い着いたやうにぴったりだ」と言って大喜びです。その友人の喜ぶ顔を見て、靴屋の主人はいかにも満足さうに頷(うなず)いてゐましたが、私はその顔を見てゐて「これが本当の靴屋といふものだな」と思ったものです。それで私も靴を買ふ気になったのですが、その時の快い雰囲気は二〇年後の今も私の心の中に鮮かに残っています。

思ふに、このやうな靴屋は、決して一代や二代で出来るものではありません。親から子、子から孫へと何代も掛って築き上げられるものでせう。私はこの時、世襲された職業の重みといふものをつくづくと感じたものです。

わが国では、明治維新により職業の世襲制が廃止されました。何が何でも親の職業を受け継がなければならないといふそれまでの制度は私も賛成できませんが、明治以後の職業選択の自由にも余りな行き過ぎがあって、素直に現状を喜ぶ気になれません。隣の芝生は美しく見えるものです。そのやうに、他人の職業はその良い所だけが見えて悪い面は見えないのです。それで「こんなに苦労の多い仕事はわしの代限りで結構。お前はもっと良い職業を選べ」と言ふわけです。自分の職業に誇りを有ち、その仕事の大切さを堂々とわが子に語る父親が今は少なくなってしまひました。

■親が自分の職業に誇りを有てない時代

傍目には楽さうに見える仕事でも、実際にやってみればそれなりの苦労はあるものです。それに、苦労があってこそ仕事の楽しさが強まるのです。楽ばかりの仕事など直に馬鹿らしくなってしまふでせう。このやうな事は、少しでも深く考へてみれば誰だって気が付くでせうに、わが子の事となると、「こんなに割の悪い仕事は自分の代限りでよい。わが子にはもっと楽な仕事に就かせてやりたい」と思ふのです。これこそ煩悩（ぼんのう）といふものであり、迷ひであるのです。

然し、「蛙の子は蛙」の諺通り、子は親に似て、親の得意とする事にはその子も自然と得意になるものです。だから、子は親の職業を受継いでするのが有利であり、成功する確率も高いのです。昔の父親は、自分の職業に誇りを有ってゐて、それをわが子に大いに吹聴したものです。とりわけその腕前の良い所を誇示して見せたものです。だから、子は父親を偉いと思って尊敬したし、自然と父親の仕事を受継いだものでした。かういふ親子関係だったから、親子の対話も内容が深く豊かなものになり、今よく言はれる「親子の断絶」など起るべくもありませんでした。

所が、今の父親は子供に向って自分の仕事に関する話をしたがらなくなりました。それはなぜでせうか。思ふに、家庭は休息の場であるから、家庭にゐる時くらゐは職場の事を忘れてゐたい、といふ気持があるからではないかと思ひます。とするならば、「職場の仕事は好きではない」といふ事になるでせう。もしも仕事が好きであるならば、家に帰っても仕事について考へたり語ったりする事がいやである訳が無いのです。

私は思ひます。「今は職業が自由に選べる世の中であるから、やりたくてやりたくてたまらない仕事を選ぶべきである」と。つまり「その仕事に従事できるなら、給料や

休暇などどうでも良い」と思へる仕事を選ぶべきであると思ひます。所が、今はその反対で、大方の人が給料や休暇の多い少ないを一番の基準にして職業を選択してゐるのです。つまり「仕事とは給料を得るため、好きな遊びをするために我慢してするもの」といふ考へ方であるのです。これでは家に帰ったら仕事について考へたり話したりする訳が無いのです。

■教育の病弊の根源は“天職”意識の喪失

今、日本は経済的には大発展を遂げ、多くの日本人が物質的に非常に恵まれた生活をしてゐますが、貧しかった時代に比べて果して幸福になったと言へるでせうか。“否”であると思ひます。

二十余年前、インドを旅行した時、そこに住む人々の生活が話にならぬ程貧しいのに、その顔は幸福に満ち足りたやうに輝いてゐた事を今でも忘れる事が出来ません。その時同行した仲間に中・高校生の姉妹がゐて、帰宅して貰った手紙に「あんなに貧しい人たちがどうしてあんなに幸福に満ち足りた顔をしてゐるのでせうか。不思議でなりません」と書いてありました。中・高校生の眼にもさう感じさせる程のものがあったのです。幸福は金や物には依らず、心に在るのです。

「“教”といふ字は『父と子と交はる』ことを表した字であり、昔は家庭が職場でもあったから、子は常に父親の仕事を見てそれを真似し、それが家業を継ぐ修業になった」と前に述べました。これが「教育の原点」であるとも言ひました。家業を継ぐ継がぬはどうであれ、教育の原点は「確（しっか）りした職業人としての基礎を作る」ことに在るのです。これは一に職業といふものをいかに観るかに懸ってゐるのです。“天職”といふ言葉

があります。「神から授かった職業」といふ意味の言葉です。「人は誰でもその人にしか無い個性を神から授けられてゐてそれで社会に貢献するものである」といふ考へ方に依るものですが、職業を選ぶとは、この「天職を見付ける」ことであるのです。

前述の靴屋の主人のやうに、自分の職業とその腕前に誇りを有ち、人々に履き心地の素晴しい靴を提供する事に生き甲斐を有って働く事こそ、真の幸福を得る道であると思ひます。このやうな人を創る力を有つ者は、何と言ってもその父親でせう。父親が自分の職業とその腕前に誇りを有ち、人々に喜ばれる仕事をしてその姿を子供に見せてゐれば、その子も自然とそのやうな人間に育つでせう。だから、「教育は、父親が自分の仕事とその腕前とに自信と誇りを有って、それを子供に誇示する事に始まる」といふのが私の考へなのです。

それで私は「今の教育の病弊の根源はこの“天職”意識の喪失に在る」と言ひたいのです。給金や休暇を第一に仕事を選んでゐるのであるから“天職”といふ意識など全くありません。だから「仕事を努力して完成させる事の楽しさ」を知りません。これでは、腕前も誇示できる程のものが磨ける訳が無く、従って職業に誇りも有ち得ません。だから、子供は父親を偉いと思ふ気持も湧かず、従って親の仕事を継いでその道で社会に大いに貢献しようといふ気も起りはしません。この“天職”意識の喪失こそが教育の病弊の根源と私は思ひますが、それは明治維新の世襲制の廃止に始まり、戦後の家族制度の廃止によって一層拍車が掛ったのです。

■親・教師と「道徳」

二十世紀フランス最大の詩人であり文明評論家であるポール・ヴァレリーの“語録”

に拠ると、同じくフランス最高の詩人であり、大正末年に駐日大使を勤めたポール・クローデルが日本人を評して「彼らは貧しい。然し高貴である」とヴァレリーに語ったと言ふのです。当時の日本人は既に堕落してゐたと思ひますが、それでもまだフランスの詩人の眼には日本人が高貴に見えたのです。然し、彼がまだ生きてゐて今の日本人を観たら「日本人は富んでゐる。然し、心は貧しい」と評するに違ひありません。

ここで断って置きますが、私は決して“清貧”を理想とするものではありません。金銭は貴重な物だと思っています。ただ同じ金銭でも、品性の高潔な人の使ふ金銭は高い価値のある働きをするのに対し、品性の下劣な人の使ふ金銭は全く価値が無いのです。つまり、金銭そのものに価値があるのでは無くて、その使ひ方によって価値が大きくも小さくもなる、といふ事なのです。

だから、二宮尊徳翁は「世の道徳を説く者は金銭を軽んじ、経済を説く者は道徳を軽んず。いづれも過ちなり」と断じ、明治の大実業家、渋沢栄一翁はこれを受けて「右手に論語、左手に算盤（そろばん）」と言って“論語と算盤説”を奨めたのです。今でも立派な実業家は皆“道徳”と“経済”とを共に尊重してゐますが、世の人の多くは口に道徳の重要な事を説くだけであって、実際にはこれを軽んじてゐるのです。かういふ親たちの姿を見て育つ今の子供たちは、家庭や学校でどんなに道徳を重んずる事の大切さを教へられても、それは“建て前”であって、本当は無視して差し支への無いものである、といふ風に解釈するものです。なぜなら、子供たちには親や教師の行為がよく見えるので、その口にする事と行ふ所とが一致してゐない事がよく判るからです。このやうな状況においては、いくら道徳を説いても害が有るだけで何の益も無いでせう。そもそも道徳といふものは説くものでは無くて実践して見せるものなのです。教へるものでは無くて感得させるものなのです。

■身を正して子に感得させる

「私の幼児教室では六人を一クラスにして指導してゐるが、クラスによっては六人の間に著しい較差があって、その為一斉指導が困難である」とは既に述べた所ですが、それが“知識”や“智能”の較差ならまだ扱ひ易いのですが、問題なのは“品性”のそれです。品性が高いと、高い智能や豊かな知識が世の為人の為に働くけれども、品性が下劣だと、智能が高く知識が豊かであればある程それを下卑（げび）た事に使ふから始末が悪いのです。

所が、今の親たちは“智能”や“知識”には敏感で、これを少しでもよく養ひ育ててくれる所があると聞くと、それこそ「千里の路も遠しとせず」で、また莫大な費用をも惜まないでこれを求め、それに委託しようとしてゐます。然し、それよりもずっと大切な“品性”については実に鈍感で、放ったらかしにしてゐるのです。正に「本末顛倒」であります。「本立ちて道生ず」と言はれてゐる通りで、品性の高い人は学習して倦（う）む事が無く、どんなに知識が豊かであらうとも満足せず、また他に誇らず益々努力して止まないのです。だから、絶えず進歩して終には成功し、自然と周囲の尊敬を集めます。所が、品性の卑しい者は僅かな知識で満足し、これを鼻に掛け、地道に努力して学習する事をしません。だから、一時的には成功する事があっても実力がそれに伴はないから終には馬脚を現すに至るのです。

その品性の較差が三歳の幼児に現れてゐるのです。然もそれが「三つ子の魂百までも」であるから何とも恐しい事ではありませんか。品性の教育は「口で教へて解らせる」ものではありません。親が自分の身を正して、それを子に感得させるものです。だから、私は「教育の原点は家庭にあり」と言ひ、「努力して行ふ善の奨め」を説いたので

す。わが子に良い手本を示さうと努力する事こそ、真の「親の愛」といふものでせう。

私は幼い時、何か母に不満を懐き、その腹癒せに迷惑になる事をしてやらうと思ひ、紙を細かく千切って客間に散らかした事があります。所が、母は客間に入って来てそれを見るなり「勲は器用だねえ。お母さんにはとてもこんなに細かくは千切れない」と言ったのです。私は途端に真赤になって俯いてしまひ、母と一緒になってそれを拾ひ集めた事を、六十数年経った今でも鮮かに覚えてゐます。そして、母の愛情の大きかった事を有難く思ふと同時に、親たる者はかうでなければならないと常に自省して来ました。

所が、今の母親たちを見てゐると、子供を高い所から眺める事が出来ず、子供と同じ立場に立って言ひ争ってゐる親が多いのです。本人は説教してゐるつもりかも知れませんが、端から見れば正に口論でしかありません。そもそもわが子を理屈でやり込める事くらゐ有害無益な行為は無いのです。それが解らないらしいのですが、これではとても高い品性が磨かれる訳がありません。

ついでに言ひますが、子供の善行を褒めるのに物や金を与へる事くらゐ子供の品性を卑しくするものはありません。貧しかった昔はそんな事をする余裕がありませんでしたから問題が無かったのです。今は余裕があり、又それは一時的には効果がありますから、物や金で子供を操る親が多いのです。こんな事をしたら、子供が金や物で動かされる、品性の卑しい人間になるのは当然です。アメリカは豊かだけれども、こんな愚かな事をする親は少ないのです。

■親は親らしく、子は子らしく

このやうな訳で、「子が良くなるのも悪くなるのも凡て親の所為」であるが、ここで“躾”について一言したいと思ひます。ヨーロッパでは、イギリス型とフランス型といふ言葉でよく対比されますが、前者は「鞭を惜めば子を駄目にする」と言はれるやうに体罰を是認する厳しい躾を言ひ、後者は体罰を否認する躾の代名詞です。所が、フランスの母親たちのアンケートに拠ると、「親に対して無礼な言動があった時」には体罰を行ふ母親が多いのです。これを見逃したら親の権威が失墜し、家庭の秩序が乱れ、教育の基盤が失はれる、と考へてゐるからです。

これに反して、日本の母親たちは、どうでも良い事には叱ったり口喧しいのに、「お母さんの馬鹿」とか「お母さんなんか死んでしまへ」といふ暴言を聞き捨てにしてゐる者が多いのです。恐らくそのやうな暴言を吐かせる原因が日頃の母親の言動にあるのでせう。もしもさうであるならば、今後は絶対に無いやうに自省する必要があります。論語に「父父たり、子子たり」とありますが、親が親らしくあれば、子は自然と子らしくなるものです。親に暴言を吐くやうな子は、きっと親から「馬鹿」と嘲られたり「死んでしまへ」と罵られたことがあったものでせう。親はこのやうな「親らしくない」言葉は絶対に使ってはならないのです。そして、子に対して「決して口にしてはいけない言葉がある」事をよく理解させてやる責任があるのです。

■幼児教育が人生を左右する

「人間の能力は幼児期に創られ、それがその後の一生を支配する」といふ事は、今は

大脳生理学を初めとする“脳諸科学”の目覚しい発達に依り明らかにされてゐることは前述しました。然るに幼児教育の世界は、依然として「幼児は幼児らしく伸び伸びと自由に遊ばせて置けば良い」といふ意見に支配されてゐて、その為に人生の最も重要な時期を無為に過してゐるのが実情です。

幼児期の教育がうまく行はれたら、後の学校教育は放って置いてもひとりでにうまく行くものです。その反対にこれがうまく行かなかったら、後の学校教育にどんなに力を入れてやった所で大した効果は得られなくなるのです。その最も基本である「品性を養ふ教育」については述べましたので、「漢字教育」を例にとって述べたいと思ひます。

前にも述べましたが、漢字教育の適時期もやはり幼児期なのです。「漢字が難しい」といふのは、幼児期にそれを学ばない事に原因があるのです。どんなに漢字指導の巧みな教師でも、六年間の漢字教育で「中学に進んだ時に各学科の教科書が読解できる生徒が半数以上ゐる」までに指導できる教師はゐないでせう。それは幼児期を過ぎると努力しても漢字を覚える事が困難になるからです。所が幼児期ですと、努力しないでもひとりでに漢字が覚えられることは既に述べた通りです。小学校の六年間に九百字の漢字が覚えられない子供でも、幼児期だったら三年間に一千字以上の漢字が楽に覚えられるのですから。

木村久一著『早教育と天才』は大正六年に初版が刊行された書物で、昭和五十二年に改訂版がでてゐます。七章から成る本文はカール・ヴィッテを初めとする先人の教育説・教育法の紹介です。文末に“結語”といふ十二ページに亘る木村氏の意見があり、そこで幼児教育の重要性が実に見事に述べられてゐます。

「学校教育というものは、どんなに良い教育者が、どんなに良い教育主義に従って、どんなに良い教育法を用いてもたいした効果の現れるものではない。学校教育からたいした効果を期待するのは間違いである」「学校教育はうまくやれば、一中に入学する者を多くするぐらいのことはできよう。それ位が関の山であって、どんなにうまくやっても、英才をつくることはできない。……しかし家庭教育はうまくやればこれができる」「人の運命は、ほとんど学齢以前の境遇と教育の如何によって定まる。子供が学齢に達して学校に入学する頃は、その運命はだいだい定まっているのである。だから学齢以前の境遇と教育の悪い子供は、教育者がどんなに骨折ってもたいした効果が現れない」

「私はこう言っても、決して学校を呪う者ではない。世には教育の大切なことを知らない人がたくさんある。またある人は知っていても自ら子供を教育しようと思わない。学校はこういう、魚のように子供を産みっ放しにする人のために必要である」

「学校は、魚のように産みっ放しの人のために必要だ」とは何と痛烈な言葉でせうか。私はかう言ひ切って憚（はばか）らない氏の気持が痛い程よく解ります。それ程に幼児期の教育の重要性は切実なのです。然るに、世の人の多くはそれを知らず、又知ってもそれを実行には移さないのです。それでは“魚”と全く同じでは無いですか。氏はカール・ヴィッテをよく知ってゐますし、幼児教育の重要性をよく知ってゐますから、何とかして世の人々に警鐘を鳴らして幼児教育についての無知、無関心さから救ひたかったのです。

然し、これ程見事な警告が行はれたのにも拘らず、大正時代以来今日まで教育界はこれを無視し続けて来たのです。世の教育者といふ者は所詮これだけの者でしか無いのです。教育は、学校や教育者を当てにすべきものでは無いのです。人の子の親たる者は、教育の責任は親に在ることを銘記して、とりわけ幼死期の教育に努力を傾注

して欲しいものです。

■画一的大量教育を行ふ学校

社会にはいろいろな職業があり、それに従って個性や能力が期待されてゐます。所が、今の学校教育はカリキュラムの編成から教室の運営、教へ方が画一的で、個性を育てる所（どころ）かこれを押潰してゐるのが現状です。前にも述べましたやうに、学校そのものが画一的大量教育を行ふ所に存在理由があるのですから、個性を育てる事を期待するのが無理といふものでせう。然し、昔の学校には個性があったから救ひがありました。今はそれがありません。

司馬遼太郎氏は大阪外国語学校の出身ですが、それは氏の受験の年に限って試験科目に数学が無かったので受験したのださうです。「その所為（せい）かこの年の学生には異才が多かったやうに思ふ」と何かに書いて居られました。当時の入試科目は、多くが「国語、漢文、英語、数学」の四科目でした。「入試に数学が無かった」といふたったこれだけでも学生の個性が多様化し、豊かになるのです。

私の学んだ大東文化学院に至っては、入試科目が「漢文」と「作文」の二つだけでした。永年に亘って日本人の精神を培って来た漢学を振興する為に、国会が満場一致で可決し創設した学校であったからとは言へ、これは実に思ひ切った英断だったと思ひます。その所為で漢文だけは揃って出来る者ばかりでしたが、その他の能力に至っては実にばらばらで多彩でした。だから、学友から受けた裨益（ひえき）には大きなものがありました。

これと対照的なのが東京と広島にあった高等師範学校です。入試科目は国語・漢文・英語・数学の外に物理・化学・地理・歴史などがありました。私などはこれを聞いた

だけで敬遠してしまひました。だから「こんな学校を受ける人ってどんな人だらう」と驚異の念を懐いてゐたものです。

又別に私立で物理学校といふ面白い学校がありました。入学試験が無いから誰でも入学できました。その代り卒業する事は実に難しい学校でした。「物理学校の学生です」と言っても誰も特別の眼で見る事はありませんでしたが、「物理学校の卒業生です」と言へば、誰でも一種畏敬の念を懐いてこれを眺めたものでした。

■個性のある教育は何処へ

然し昔の学校は、入試に個性があったばかりではありません。カリキュラムの編成や教授法にも個性があったのです。大東文化学院では、科目が「論語」とか「孟子」「史記」

といふやうになってゐて、中国の古典を一冊づつ片っ端から学習して行ったのです。全科目必修で、朝から毎日六時間ぶっ続けに学習する事になってゐて、その中の数科目が“輪講（りんこう）”と言って学生が教授に代って輪番に講義し、それに関する学生の質問にも答へる事になってゐました。だから、毎日予習復習で大変でした。今の大学生にはとても想像できないでせう。その代り、かういふ教育を六年間受けた私どもの漢文における自信は極めて大きいものがあります。

昔の学校にはこれだけの個性がありました。だから、自分に合った学校を選ぶ事により、自然と自分の個性を育てる事が出来たやうに思ひます。所が、今は入学試験から始まってカリキュラムの編成、教授法その他総てどこの大学も皆同じで、個性といふものが全くありません。とりわけ入試の画一性は、高校以下の学校をこれに適応させる為に画一的な教育を一層画一的にしてしまひ、個性の強い人間は大学に入れ

なくなってしまひました。

画一的な人間ばかりの社会は、いかに個々の能力が高くても沈滞するものです。俗に言はれてゐるやうに「大将ばかりでは戦争は出来ない」からです。個性のある人間が社会を活性化し、世の進歩発展に寄与してゐるのです。だから、社会は万能の人間よりも一芸に秀でた人間を必要としてゐるのです。

所が学校は、一学科に秀でてゐるだけではこれを不可とし、総ての学科に精通する事を要求します。

昔の教師には個性がありました。「普通の教師はただ説明する。優秀な教師は理解させる。本当の教師は学習者の心に火を点ける」と言ひます。学習者の心に火を点ける事が出来るのは「個性のある教師」だけです。幸ひ学校には大勢の教師がゐます。その教師たちがそれぞれに個性を発揮すれば、学習者はそのいづれかに触発され点火される可能性が高いでせう。

但、残念な事には、今の教師たちは個性のある教育を恐れて画一的教育に精出してゐるのです。その主な理由は、校長が個性的な学級経営を嫌ひ、個性的な教師を敬遠するからです。多くの校長は、保身上、高い教育効果よりも安全無事の教育を望んでゐます。

然し、苟（いやしく）も教育者たる者は「学習者の心に火を点ける」真の教師を目指し、「教育の醍醐味」を知って楽しんで欲しいと思ひます。

■先づ良田を耕す

社会は百芸に通じた人間よりも一芸に秀でた人間を必要としてゐます。然るに学

校は、どんなに一学科に秀でてゐてもこれを不可とし、総ての学科に精通する事を要求してゐます。これが「学校は子供の個性を潰す所である」と言はれる所以です。

二宮尊徳翁は「先づ良田を耕せ」と教へています。荒地を耕した事では翁の右に出る者はゐないでせう。その翁が「先づ良田から耕せ。耕し終ってなほ余力があったら、その時は荒地を耕すが良い。余力の無いのに、又は初めから荒地を耕すのは愚かである」と教へたのです。

良田は楽に耕せて然も収穫が多いのです。労少なくして効が多いのです。かういふ労働は張合いがあるので働くのが楽しくなります。だから益々耕作に励み、自然と富農になるものです。所が、荒地は耕すのが困難で然も収穫が少ないですから、労多くして効少なしです。これでは労働の楽しさが得られず、終には働く意欲を失って、愈々貧しくなって行きます。

学業もこれと全く同じです。成績の良い科目は言はば良田なのです。僅かの学習で容易に立派な成績が得られ、学習が益々楽しくなります。だから益々学習して益々賢くなるのです。所が、成績の悪い科目は荒地のやうなもので、努力して学習してもなかなか成績が向上せず、その学習はいつも苦しいものです。

それなのに学校の教師は「成績の良い科目は放って置いて、その分悪い科目に力を入れなさい」と言って、不得意な科目に精を出させてゐます。だから、多くの子供たちが学習意欲を失って、終には学校嫌ひになるのです。総ての学科に精通する事はいくら努力しても必ず出来るといふものでは無いですし、又世の中においてはそれ程望ましい事でもありません。世の進歩発展に貢献した人の多くは、万能の人よりもむしろ唯一つの道を突き進んだ人であります。論語にも「君子は多ならんや」とあります。今の学校教育は多才の小人を作る事を目指してゐる訳です。

■“読む力”“理解する力”が全てに先立つ

前にも書きましたが、我が国の学校は、小学校の一年生から科目が多く有り過ぎます。大抵の国が、三年生までは学科が“読み”“書き”“算数”だけで、社会科や理科などはありません。“読み”の力の不十分なうちから社会科や理科の学習をしても、徒らに時間を費すばかりで効果が乏しいからです。ですから、どこの国でも学科の数を少なくしてその分国語の時間をふやしてゐますので、我が国の二倍以上もあります。

例へばドイツでは、三年生まで全体の五分の三までを国語の学習に充（あ）ててゐます。三年間に国語力、特に“読み”の力を高め、その力で他の学科の学習を進めるのです。どんな学科でも、教科書を読みそれを理解する事から始まります。だから、読みの力が強ければ学習がうまく行きますが、その力が弱ければ総ての学習がうまく行かなくなるのです。

『大学』に「物には本末あり、事には終始あり、先後する所を知れば道に近し」とあり、『論語』には「君子は本を務む」とあります。物事には本末軽重がありますから、それを行ふには先後の順序に従はねばならぬ、といふ事なのです。国語は総ての学科の本であります。ですから、これを先にしてその能力を高めれば、他の学科は自然とうまく行きますが、さうしなかったら決してうまく行きません。これを『論語』では「本立ちて道生ず」と言ひ、『大学』では「その本乱れて末治まることあらず」と言ってゐます。所が、我が国の学校教育は本を疎かにして枝葉末節に力を入れてゐるので、うまく行く訳が無いのです。

又、国語教育の中にも本末があります“読み”が本で“書く”“話す”“聞く”は末で

す。ですから、戦前の国語の時間は「読み方」の時間と呼ばれ、教科書は「読本」と呼ばれました。所が、戦後“聞く”“話す”“読む”“書く”が並列され、特に“聞く”“話す”が重視されるやうになりました。アメリカでは英語を使はない家庭も多いので当然の処置ですが、我が国ではその理由がありません。正に悪しき猿真似であったと言ふほかはありません。

真の“話す”力は“読み”に因って養はれるのです。“読み”の無い唯“話す”だけの学習は徒らに饒舌を増すだけです。“聞く”学習も“読み”の学習が深まれば自然とその能力が高まります。“読む”学習を怠ったら、いくら“聞く”“話す”学習に努めてもその能力は向上しないのです。

前の章でも述べましたやうに、我が国の文字教育は、明治以来「読み書き」が同時に並行して進められて来ました。これも誤りです。“読み”が本であり、先でなければなりません。読みが深まり字形の認知力が高まれば僅かな学習で容易に書けるやうになるのに、同時に並行して学習させてゐるから書くのが難しいのです。それも本質的な構造に関係の無い枝葉末節の点画や筆順の指導に力を入れ過ぎてゐます。これが子供を漢字嫌ひにさせてゐる最大の原因なのです。

■忘れられた儒教精神

「教育の本義は親子の交はりに在る」とは既に述べた所ですが、その理想的な在り方については、中国で興り中国で発達した儒教に詳しく述べられてゐます。我が国は、有史以来徳川時代まで、絶えず中国の文化を取入れる事に努めて来ましたので、儒教は常に我が国の教育の支柱となってゐて、それは明治維新の原動力ともなったもので

す。然るに、明治政府は、新しい西欧の物質文明を取入れる事に汲々とする余り、伝統の儒教を軽んずるやうになり、その風潮は昭和の敗戦で一層甚しくなりました。

その結果、僥倖を得て経済的には大発展を遂げましたけれども、これを支へるべき精神文化が頽廃した為に、その経済力を真に活かす術を知らず、その為折角発展途上国に対して多大の援助をしながら、外国人から感謝され、経済大国と尊敬されるはずなのに、逆にエコノミックアニマルといふ蔑称を受ける有様です。

前にも述べた事ですが、二宮尊徳翁は、「世の道徳を説く者は多くは経済を軽んじ、経済を説く者は道徳を軽んず。共に過ちなり」と喝破して、「物は心によって初めて価値を生じ、心は物によって初めて生きた働きをする」ものですから、「物と心との調和がいつも保たれるやうに心掛けなければならない」と警告しています。

翁はその事を巧みにも水車に譬(たとえ)へてゐます。水車は下の半分が水に潰(つか)り、上の半分が水の外に出てゐてそれで初めて回転し、その働きを発揮します。水車が水から離れてしまったら全く回転せず、水にすっかり潰ってしまったら回転しないばかりか壊れてしまひます。その水車を人に、水を欲望に譬へるのです。人は半分だけ欲望に従って働き、半分は欲望から離れ、然も欲望とは逆の方向に進まないと、人も水車と同じで真の働きは出来ないと説きます。水車の上半分と下半分とは逆の方向に進んで回転するやうに、「人間も半ばは欲望に従って働いて財を蓄へ、半ばは欲望に背いて財を推譲しないと真の繁栄は無い」といふ翁の教へは真(まこと)に納得しやすいものです。

■二宮尊徳翁と渋沢栄一翁

二宮金次郎(尊徳)と言へば、今でも薪を背負って読書してゐる姿を思ひ浮べられる

方が多いと思ひます。その手にする本は何でせうか。像にその書名がはっきりと刻まれてゐます。儒教の経典『大学』です。それは「修身・斉家・治国・平天下」の道を説いた書です。その中に「徳は本なり、財は末なり」とあります。これを世の学者たちは「徳は重んずべきものであり、財は軽んずべきものである」と解いています。

然し、翁は「本とは木の根、末とは枝葉の事である。木に取っては、根も枝も葉もいづれ劣らず大切なものである」と解きます。ただ枝葉を栄えさせる為には、枝葉は放っておいて根を培ふことが必要なのです。根を培へば枝葉は自然と栄える。そのやうに財においてもこれを豊かにしようと思はれるならば、財を求める前に自分の徳を培ふことが必要なのです。徳を養ひ磨く事を怠って財を求める事にのみ熱中したのでは、財は得にくく、得ても永続きしない、と教へます。

明治時代に尊徳翁の精神を実業界で実践し、その正しい事を証明したのが渋沢栄一翁でした。翁は「右手に論語、左手に算盤」説を唱へました。翁は国立第一銀行を初め五百余の会社を設立し、これを立派に経営したばかりか東京商大（一橋大学の前身）を創立し、中国古典教育で有名な二松学舎の舎長を勤めるなど、経済と教育とに献身された方です。

今でも、超一流の企業は総て道徳と経済との調和がうまく取れてゐます。いや、調和がうまく取れてゐるから繁栄してゐるのです。道徳を無視したら、一時は繁栄するやうに見えても、いつかはきっと転落するに決ってゐます。これを「天網恢々（てんもうかいかい）、疎なれども漏さず」と言ふのです。どんなに美しい花を咲かせてゐても、根が衰へたら早かれ晩（おそ）かれ枯れるに決ってゐます。

渋沢翁は八十四歳で『論語講義』を刊行されましたが、その序文に「名教学術は実業によって貴く、実業は名教道徳によって光を発す。二者は固（もと）より一致にして相睽離（けいり）

する事を許さず。もし二者暌離せんか。学問は死物となり、名教も道徳も紙上の空論となる。……」とあります。これは『大学』の「仁者は財を以て身を発し、不仁者は身を以て財を発す」の思想に通ずるものです。財の大事である事は誰でもよく知ってゐますが「財は徳によって光を発するものである」事を知る者が今は残念ですが少ないやうです。

■かつて高貴だった日本人の心

前にも例として挙げましたが、二十世紀のフランス最大の詩人ポール・クローデルが、これまた詩人として一世を風靡したポール・ヴァレリーに向って語った言葉が、外科医学の泰斗で文学研究でも高名なアンリ・モンドール博士によって記録され、書物になってゐます。それに拠ると、時は一九四三年（昭和十八年）第二次世界大戦最中の秋の一夜、クローデルはヴァレリーにかう語ってゐます。「私が断じて滅びない事を願ふ一つの国民がある。それは日本人だ。あれ程興味ある太古からの文明は消滅させてはならない。日本は驚くべき発展をしたが、それは当然で、他のいかなる国民にもこれ程の資格は無い。彼らは貧乏だ。然し、高貴だ」（『言霊の幸ふ国』市原豊太著より）と。

クローデルは、大正時代に六年間、フランス駐日大使として当時の日本人に接すると同時に、日本及び日本人について深く観察研究し、日本及び日本人の良さを誰よりもよく熟知してゐたと思はれます。それにしても「彼らは貧乏だ。然し、高貴だ」とは何と嬉しい評価でせうか。私はこの言葉に接する時、いつも感激して涙ぐんでしまひます。クローデルに取っては敵国である日本を「世界で滅びない事を順ふ唯一つの国」と讃へてくれたのです。感激して俞々それにふさはしい人にならなければと奮起せず

にはゐられないではないでせうか。然し、今の日本はどうでせうか。彼がもし生きてゐて今の日本人を観たら「物は豊かだが心は卑しい」と評するに決ってゐます。

この半世紀の間に、日本はどうしてこんなにも精神的に堕落してしまったのでせう。勿論、小学校で道徳教育をしなくなった事にも原因があるでせう。然し、もっと突き詰めて言ふなら、千数百年もの長い間、日本精神を培って来た儒教思想を、敗戦以後、敝履(へいり)のやうに棄ててしまった事に原因があるのです。

「儒教は古くさくて現代の用にならない」と言ふ人が多いやうです。儒教は、紀元前五五〇年に生れた孔子の言行を本とした思想でありますから、古いと言へば確かに古いに違ひありません。然し、孔子は世界三大聖人として、釈迦、キリストと並び、世界中の人々から二千五百年に亘って尊敬されて来てゐて、その思想は、韓国や台湾、シンガポールでは、民族精神の根幹として今もなほ尊重され、生き続けてゐるのです。「古くさくて現代の用にならない」と言ふ人は、儒教を真には理解してゐない所から言ふものでせう。

■人間らしい心を忘れた国は瓦解する

総務庁の「世界青年意識調査」(平成元年一月発行)に拠れば、「年老いた親を、どんなことをしてでも養ふか」といふアンケートに対して、シンガポールの七四%が最高で、韓国が七〇%で二位、(台湾は調査に洩れてゐましたが、調査すればこれに勝るとも劣らぬ数値を示した事を確信します)アメリカでさへ五二%といふのに、日本は僅かに二五%でした。また、「自分の利益を犠牲にしても国の為に役立ちたいと思ふか」といふ質問に至っては、シンガポールが六二%、アメリカが五七%であったのに対して、日

本はアメリカの十分の一にも及ばない五・五％であり、調査対象国の中で最低でした。

儒教が最も重んずる徳は「仁」です。これは「人」と「二」とで「人二人」、つまり「人と人」の関係を意味した字で、英語の“human”から作られた“humanity”に符合します。「人間らしさ」と解釈しても良いですが、中味は「思ひやりの心」です。キリストの説く「愛」、釈迦の「慈悲」と同じだと考へても差支へないと思ひます。

「年老いた親を、どんな事をしてでも養ふ」といふ心は「仁」の基礎であり、出発点であります。この心が無いやうな者は「自分の利益を犠牲にしても、国(他人)の為に役立ちたい」といふ心が有てるわけが無いのです。然し、この心が無くては人間の社会は成り立たないのです。国民の半数以上がこの心を有たなかったら、困難に遭遇したら一溜(ひとたま)りも無く滅されてしまひます。五・五％の日本では、外患の虞(おそ)れが無くても内から瓦解(がかい)するでせう。

儒教を大切にしているシンガポールや韓国、台湾が、世界で最も目覚しい発展を遂げ、且「人間らしい心」の持ち主が多いといふ事実から考へれば、「儒教は古くさくて用にならない」といふ考へ方がいかに間違ってゐるか明らかでせう。

■「孝」の思想と遺伝子

たびたび繰り返しますが、「教育の原点は家庭に在る」、これからの教育は何よりもこの原点に立戻ることが肝要だと思ひます。昔は「厳父慈母」といふ言葉が存在しました。厳父の厳とは、子に厳しいことよりも、自身に厳しいことを言ひます。なぜなら、『孝経』には「厳によりて敬を教ふ」とあるからです。

人を尊敬する心は、親を尊敬する心から発し育つものです。故に、人の子の親たる

者は、子が尊敬せずにはゐられないやうな親であるべく努力する責任があります。同様にして、人を愛する心は親を愛する心から発し育つものですから、親たる者は子が親を愛せずにはゐられないやうな親であるやう、親が十分に慈愛の心を発揮しなければいけません。

天子の孝を説いた、『孝経』の天子章にも「親を愛する者は敢て人を悪(にく)まず、親を敬ふ者は敢て人を慢(あなど)らず」とあります。「親を敬愛する心が、他人をも敬愛する心を養ひ育てる」と言ふのです。天子が親を敬愛する心を以て万民を敬愛するならば、万民も天子を敬愛し信頼し、延(ひ)いては人々相互に敬愛し信頼しあふやうになるでせう。これが天子の孝であると言ふのです。

我が皇室は、歴代、この「天子の孝」を見事に実践し給うてゐられます。ですから、国民が皇室を敬愛し信頼するのです。道徳が地に堕ちた今日、国民の多くが自分の親を敬愛する心を失ってゐるのにも拘らず、この社会か維持されてゐるのは、敬愛でき信頼できる皇室を身近に拝してゐるからでせう。これが『孝経』に言ふ「一人慶あらば兆民これに頼る」といふ事です。

このやうなわけで、親が厳父慈母であるならば、その子は自然と人を敬愛する心を有った者に育ち、成人しては人から敬愛される人物になるのです。そしてこれが「孝の最終目標」なのであります。『孝経』には「孝は親に仕ふるに始まり、身を立つるに終る」とあります。親に奉仕することよりも、子が立派な人間になることの方がより大きな孝なのであり、親はそれを希求してゐるのであります。

この孝の思想は、現代の最も新しい科学に照しても納得できるものです。この頃遺伝子の研究で世界的な業績を挙げられた、筑波大学教授・村上和雄博士のお話を聴く機会がありましたが、そのお話に依れば、遺伝子は人間のものも単細胞の細菌のも

のも全く同じ構造であると言ふのです。

■遺伝子は受継がれる

遺伝子は、幅が一ミリメートルの五十万分の一という超々ミクロのテープで、それは文字の役目をする四種類の分子の環の連結によって作られた鎖状のテープです。それが細菌のものは二百万個の環で作られてゐますが、人間のものは三十億個もの環が連結してゐるので、二重の螺旋（らせん）状に折り畳まれて細胞核の中に納められてゐるのです。

この三十億個の環を文字とすれば、遺伝子の内容は、一ページ千字で書かれた三百ページの本に直すと一万冊の本になるわけです。これには、単細胞生物から進化して人間に成るまでの三十億年に亘る生物の歴史が刻まれてゐるのだと言ふことです。それで今でも人は、妊娠から誕生までの間に、この三十億年に亘る生物の発展の歴史を一つ一つ踏んで人間に成るのださうです。

我々の人体は、約六十兆個の細胞によって作られてゐるといひますが、頭の髪の毛から足の爪先に至るまで、いろいろな種類の細胞があり、これが総てこの一万冊という膨大な人体設計書である遺伝子に拠り、設計書通りにいささかの違ひも無く構築されるのです。体のどこが傷ついても直に元通りに修復されるのは、総て設計書に従って忠実に作られるからなのです。

三十億年の昔、どうした訳か全く判りませんが、この地球上に一つの細胞が誕生しました。これが三十分ごとに分裂しましたので、一日と経たぬ間に十兆を超す仲間に殖えました。これらは皆同じ遺伝子で作られましたから、全く同じ細胞でした。然し、何億年といふ間に、ある細胞が何かの影響を受けて遺伝子の一部に変化を生じ、

異った細飽が作られ、また、細胞同士が結合しました。かうして三十億年間にいろいろな生物が出現し、今から百万年前、遂に人間が誕生したのです。従って、僅か二百万字の設計書が三十億字といふ膨大な設計書に発展したのです。

人体を構成する細胞は、初めは勢ひよく分裂し成長しますが、やがてそれは弱まり、老化して最後は死ぬのです。然し、その遺伝子はその前に子に受継がれ、生命は再び勢ひを盛返します。小さな“我”は老化し、亡びますが、生命の本体である遺伝子は我が子に受継がれ、生き続けて行くのです。かう考へますと、自分の肉体は親の異体であり、また三十億年を生き通して来た貴重な存在であり、とても粗末には出来ないといふ気持が強まります。

■生命の摂理が語る親と子の道理

今や“我”の本体が遺伝子に在ることは明らかになりました。世界に唯一人の存在である“我”を我たらしめてゐるものは、その遺伝子が世界に唯一つしか存在しないものだからです。一万冊分もある“我”の設計書の大部分は、世界中の他の人間の物と同じ内容の物です(だから、同じ人間になる訳です)が、他には絶対に無い“我”独特の部分があります。それが“我”を我たらしめてゐるのです。

その一万冊の“我”の設計書は、父親から五千冊、母親から五千冊を受継いだものです。そして“我”もまた“我”の設計書の中から五千冊を選り抜き、これに配偶者の設計書の五千冊を加へて一万冊とし“我”を一層「より良き我」たらしむべく、「我が子」としてこの世に送り出すのです。ですから、我が子を生んだといふ事それ自体が“教

育”そのものである、といふ事も出来るのです。

生物に雌雄の性別がまだ存在しなかった時には、全く同一の生物を殖やすだけであり、進歩と言へるものは有り得べくも無かったのですが、何かの原因で雌雄の両性が生じ、自分の遺伝子に配偶者の遺伝子の半分を加へる事に依り、初めて進歩が始まりました。このやうな生物の進歩の果てに、人類がこの世に出現したのであります。

さて、生きとし生ける物は総て死を免れる事が出来ませんが、それは「遺伝子に死のプログラムが用意されてゐるからである」といふ学説があります。恐らくさうであらうと私も考へます。生物に両性が生じ、「両性の遺伝子の合体に依って新しい生命が創られる」ことで進歩が生じたのですから、新しい生命を創り出した後もなほ古い生命がいつまでも地球上に存在してゐては邪魔で、且、新しい生命を創り出した意味が無いことになります。生命を創り出す程の力を有った遺伝子が、新しい生命を創り出すだけで、言はば不用になった古い生命を消滅させるプログラムを用意してゐない訳が無い、と考へられるからです。

とすれば、親は子が生れたら言はば蝉（せみ）の抜け殻みたいな存在です。我が子を自分より大切に思ふのが当然の道理です。ですから、危機に瀕した時には、親が我が身を犠牲にしても我が子を救はうとするのです。

また、人の子の親たる者は「子を立派に教育する事が、人間として最も大切な仕事である」といふ認識を有つ必要があると思ひます。人間として、どんなに立派な仕事を成し遂げても、我が子を育て損ねたら、差引きゼロであると評価されても仕方がないでせう。

■親の信条を子に伝へる

“家”と言へば“夫婦”を考へるのは西欧的考へ方です。これに対して“親子”を考へるのが東洋的考え方です。放牧といふ厳しい生活を基盤に発達した西欧思想では、個人の尊厳を唱ひ、親子でも別人格である事を強調しますが、恵まれた大自然の中で平和な農耕を営む生活の中では、個人を超えた“家”を重んずるのが自然で、これが東洋精神の基盤です。近代生活では、親子も法的に別人格として扱ひますが、精神的に別人格であってはならないのです。その事は、遺伝子学が“我”は両親の生命の延長であり、更には祖父母、曽祖父母に繋がってゐる事を教へてくれてゐるからです。

戦後の日本は、西欧の力に屈した為、「家を大切にする心」を失ってしまひましたが、この“家”こそが真の“我”なのです。“世”といふ字は“十”を三つ合はせて作った字で、元来は“三十”といふ意味の字です。人は三十年で跡継ぎを得て世代を交替するのが普通なので、「人の世」を意味するやうになりました。木が年ごとに葉や花を替へながらその生命を保ってゐるやうに、人間は三十年ごとに世代を替へながら“家”といふ大きな生命を保ってゐるのです。個人は“小我”であり“家”は“大我”なのです。

これからの教育は、以上の認識の基盤の上に計画され、実践されなければならないのです。それも、子供たちにその認識を与へる前に、親たちが先づこの認識を有つ必要があります。今の親たちの「親には親の生活が有る」といふ、親の身勝手な考へ方を改めなければ、子供に正しい認識が出来る訳が無いのです。

「親の考へを子に押付けてはならない」と言ふのは、強制の不可な事を言ふのですから、親の信条を子に伝へる事は人の親としての使命であって、これを否定するものではありません。人類は、父祖代々の生き方を受継ぎ、これに少しばかりの新しい体験を

加へる事に因り、今日の偉大を成したのです。遠い先祖から受継ぎ蓄積して来た智慧を否定して何程の事が出来ませうか。直系の先祖は、三十代(一代三十年として九百年)遡(さかのぼ)っただけでもその教は実に十億を超えます。この認識に立つ時、我が命の貴さ、我が子の教育の大切さが痛感され、自由放任に等しい今の教育の愚かさがよく解るでせう。

■現在、国語力が低下してゐる

「二十一世紀の世界は、日本が最も活躍する世紀になるであらう」とは、“水平思考”で一世を風靡したイギリス剣橋(ケンブリッジ)大学教授デボノ博士の予言ですが、その根拠は「イギリスではせいぜい百の単位でしか読まれない学術専門書が、日本では千、乃至、万の単位で読まれてゐる」といふ事に在りました。一国の興廃は、国民の多くが学問を尊重してゐるか否かに関ってゐますが、それは学術専門書の読まれる量の多寡に現れる、と考へられるからです。

然し、この状況は今も変りが無いでせうか。私は甚だ疑問に思ひます。読書力の基礎は漢字に在りますが、その力が年ごとに低下してゐるからです。その原因の第一は、前の章でも述べましたやうに、敗戦の原因が繁雑な漢字の使用に在ったとしてその廃絶を図った為に漢字教育が甚しく軽んぜられ、その教育を受けて育った今の教師たちには漢字を教育する力が無い、といふ事に在ります。

その上にもう一つ、国語の学習時間が外の国に較べて極端に少ない事が挙げられます。世界のいづれの国でも、小学校の前半の三年間の学科は国語と算数に限られてゐて、中でも国語の時間が特に多く、全体の半分以上を占めてゐる、といふのに、我が国

だけが全体の四分の一の時間で済ませてゐるのです。前に述べましたやうに、ドイツでは一週間の学習時間、二十四時間のうち国語の時間が十四時間もあるのに、我が国では僅かに六時間しか無いのです。

ドイツではこのやうにして三年間に国語力を十分に伸ばし、その力を四年生以降の他の学科の学習に活用します。ドイツでは四年生になって初めて理科がありますが、その時間は僅かに二時間です。我が国では戦後から平成三年度までずっと一年生から理科が二時間もあり、三年生、四年生では三時間もありました。然し、時間ばかり多くあっても国語力が未熟では、理科の学習は決して深まらないでせう。幸ひ、平成四年度から理科や社会科は三年生以降に改められましたが、その替り“生活科”といふ新しい学科が増え、国語の時間はちょっぴり増えただけです。

どこの国でもしてゐますやうに、我が国でも初めの三年間の学習は国語と算数だけに絞るべきです。その方が結局他の学科の学習にも有効なのです。我が国でも戦前は四年生で初めて理科をやり、五年生で地理や歴史をやりました。それが良いのです。一日も早く元に戻す事が必要です。

■国語教育が全学科の要

以前「六歳でSF童話大賞。その名も竹下龍之介くん」といふ記事が賑ひました。並居る大人を蹴落して大賞を獲得したのですから、その文の内容の勝れてゐる事は言ふまでもありません。自筆の文字を見ましたが、五、六年生も及ばない程立派な漢字かな混り文でした。ですから「天才幼稚園児」といふのが一般の世評ですが、私の経験から言へば、「龍之介くんが受けたやうな漢字教育を受ければ、誰でもあのやうにな

れる」のです。

幼児期の間に、龍之介くん位の国語力を付ける事が、これからの教育には何よりも必要な事だと思ひます。かうしてやれば小学校以降の国語の学習はもう要らないと思はれるかも知れませんが、さうではありません。国語の学習時間はいくらあっても、多過ぎる事は無いのです。あらゆる能力はこれから引き出され、これに依り発展するものだからです。

誰でも能力が身に付くと、その能力を使はずにはゐられないものです。使ひたくて仕方が無いのです。ですから、読書能力が付くと読書せずにはゐられなくなります。書物は人類最高の宝庫ですから、読めば読む程興味が増し、読みたい気持が一層強まるのです。かうして人間はひとりでに磨かれて行くものです。

だから、極言すれば「教育は国語教育だけあれば良い」のです。これさへ成功すればあとはその人の個性に応じて好きな書物を読むのに任せれば良いのです。読みたくて読みたくてたまらない書物は、速く読めて且獲得できる物が多いのです。私は中学時代からさういふ書物の読み方をして来ました。学校でも、教科書の陰に好きな本を忍ばせて置き、読み耽ったものですが、それが今の私を作ってくれたのだと思ってゐます。

その時犠牲になった地理、歴史、生物など、今になって興味深く、書店で見付けては買って来て読んでゐる次第です。中学時代の知識が無くても少しも困らないのです。読みたい本を読む事を主にして読書する事が、学校教育においても考へられてほしいと思ひます。

■“聴力”がものをいふ外国語学習

幼児期から始めるべき学習として、前の章で「漢字の学習」を強調しましたが、漢字に続いては「外国語の学習」を挙げたいと思ひます。この広い世界においても、日本人くらゐ外国語の学習に下手な国民は無いでせう。頭の働きは良い日本人であるのに、どうして外国語の学習となるとこんなにも下手なのでせうか。

その原因は日本人の“耳”に在るのです。外国語の学習に最も必要な能力は“聴力”なのです。その聴力が日本人はひどく貧弱なのです。では、どうして日本人は聴力がそんなに貧弱なのでせうか。その理由は、第一に日本人は日本語以外の言葉を聞く機会が殆ど無いままに育つからであり、第二にはその日本語が世界一「音韻の種類が少ない」からであります。

耳は初めからいろいろな音を聴き分ける能力を具へてゐるのではありません。聴力は幼児期に作られますが、それはいろいろな音を聴く事に依り、それらの音をそのままに正確に受取る機能が大脳の神経細胞に備はって行くからなのです。ですから、毎日豊富な音韻を聴いて育った幼児の耳は、貧富な音韻を正確に聴き分ける能力を有つ(も)やうになりますが、貧弱な音韻しか聴かないで育った幼児の耳は、豊皆な音韻を正確に聴き分ける能力が育たないで終るのです。

又、耳がいろいろな音韻を聴き分けられないと、それらの音韻を発声する能力も育ちません。耳が、自分の発声する音韻を既に頭の中に収められてゐる音韻と比べながらこれを調整するわけですから、耳が正しく聴き分けられない音韻は、これを正しく発声する事が出来ないのであります。それは「生まれながらの聾(ろう)者は唖(あ)者にならざるを得ない」のと同じ道理であります。

このやうな訳で、日本人は複雑な外国語の音韻を聴き分ける事が出来ず、従って正しく発音する事が出来ません。音感教育で有名な木下達也氏の言に依れば「三・四・五歳の幼児に同じ音感教育を始めると、三歳児は四歳児の半分の時間で済むが、五歳児は四歳児の二倍の時間が掛かる」と言ひます。このやうに聴力の教育は早い程有効なのです。

■幼児期から英語を学ばせる

ですから、日本人でも幼児期に外国語を耳にして育った者は、立派に外国語を聴き話す事が出来る訳です。その証拠に、仕事の関係で外国に一家を挙げて移住する家庭が多いやうですが、幼児は直に現地人と全く違はない立派な発音で原地の言葉を話すやうになります。さういふ訳で、二十一世紀の世界で活躍する為には自由に外国人と会話が出来るやう、幼児期に外国語を聴き話す学習をして置く必要がある、と私は考へます。

かう言ふと、「幼児期に外国に住んでその国の言葉を覚えても、帰国して二・三年も経てばすっかり忘れてしまうものである。だから、幼児期の外国語の学習は、その後も引続いて学習するのでなければ全く無意味である」と言って否定する人がありますが、然し、それは違ひます。言葉は永く使はないでゐると確かに忘れてしまひますが、外国語を正確に聴き分ける“耳”と外国語を話す“舌”とは決して失はれる事が無いのです。言葉はすっかり忘れてしまっても、再びその外国語に接した際にはその音声を正確に聴き分ける事が出来、又それを立派に発音する事も出来るものです。

私がかう考へるやうになったのには訳があります。茅誠司先生(元東大総長)から伺

った話ですが、「大学での教え子で、大学時代にはお世辞にも英語が達者だとは言へなかったのに、アメリカで二・三年勤務して帰国した時には実に日本人離れした見事な英語を話すやうになってゐた男がゐた。それで不思議に思ってゐた所、彼は幼児期に、僅かではあったがアメリカで暮した事があったことが判った。だから、彼は初めから英語を聴き話す力があったのだが、日本人の英語の先生ではその能力が使はれず、従って発揮されなかった。それがアメリカに行き、本物の英語を耳にしたので、英語を聴き分ける能力が再び使はれ、その能力が発揚されたものであらう」といふ話に基くものです。

ですから、幼児期の英語の学習は、日本人の先生では無意味だと言って良いでせう。どうしても本場の英語を、日本語に存在しない音韻の正確な発音を幼児に聴かせて、その音韻を正しく聴き分けられ、又それを正しく発音できるやうに導く事が必要です。幼児期のうちにこれだけの事をしてやらないと、社会人になっていくら英語の学習をしても“R”と“L”の聴き分けさへも出来ないでせう。

英語の学習に必要なのは“真似”と“反復”です。幸ひ幼児は皆真似も反復も大好きです。ですから、幼稚園・保育園では英語を学習させるべきです。英米人だからと言って発音が立派だとは限らないから、私は発声機器に依る学習をお奨めします。

■音感を養ふのは幼児期に

東京芸術大学のヴァイオリソ科を卒業された森瑶子さんが、音楽家の道を歩む事を断念して作家に転向されたのは、「小学生になってからヴァイオリソを始めた為に、絶対音感が身に着いてゐない」事を覚ったからであると聞いてゐます。絶対音感は幼児

期だと容易に身に着くけれども、幼児期を過ぎると途端に難しくなり、終(つい)にはどんなに努力しても身に着かなくなると言はれます。

音感といふものは「三歳児は四歳児の半分の学習で身に着くが、五歳児は四歳児の二倍もの時間を掛けないと身に着かない」ものであることは先にも述べました通りですから、芸大に進んでから気が付いたのではもうどうにもならないのです。

音楽家になるならぬは幼児期には決められない事なので、幼児期の間に親は我が子に絶対音感を身に着けさせて置く配慮をして欲しいと思ひます。さうで無いと、森瑶子さんのやうな目に遭(あ)ふからです。転向しても森さんのやうに別の道で成功すれば良いが、それは万に一つ有るかどうかの難事でせう。それに、音楽家にならなくても音感が身に着いてゐては困るといふ事は無いのですから、着けさせて置いてやるべきだと思ひます。

音感教育も親がするのに越した事は無いですが、それが出来る親は少ないと思はれますので、誰にも出来る事を述べませう。

まづ一つには、音程が正確に調律されてゐる楽器を使って遊ばせて置くだけでも、結構音感が身に着くものだといふ事です。幼児だからと言ってよく安物の楽器を与へる親が多いですが、これはとんでもない事で、幼児だからこそ本格的な立派な楽器を与へる事が大切なのです。然し、いくら高価なピアノだと言っても、度々調律師に看て貰ふ事を怠ったら何にもなりません。

これも前に述べましたが、“耳”は幼児期にいろいろな音や声を聴く事に因って“聴力”が育って行く」ものですから、幼児期に優れた音楽を聴いて育った子供は、優れた音楽によく反応し、又よくこれを聴き分ける能力が自然と身に着くもののやうであります。その好い例を、もう二十年も昔の事ですが、当時ソニーの社長だった井深大

氏から聞いた事があります。

確か森ビルの森社長とそのお嬢さんだったと記憶してゐますが、お嬢さんは、愛育病院で出産され、その後も都合があってそのまま一年程病院で保育されたといふお嬢さんであります。森氏は暇の折には家でよくピアノを弾かれたさうですが、ベートーヴェンの「エリーゼの為に」を弾いてゐる時に限って、いつとも無く、どこからとも無くお嬢さんが現れて、傍でそれをうっとりとした表情で聴いてゐる、といふのです。

そこで「この曲が好き?」と尋ねると「この曲を聴いてゐると、何だか判らないけれどもとても好い気持になる」といふ返事です

■乳・幼児期に聴いた曲は人格に影響を及ぼす

この話を井深氏に話されると、「面白い。それはきっと愛育病院にゐる間、毎日聴いた曲に違ひない。調べてみる必要がある」と言って森氏を促がされました。調べてみると果してその通りだったのです。

生後一年内外の体験といふものは、大脳がこれを受入れはするが記憶として取出す事は出来ません。それは完全に消化して人格の一部になってしまふからでせう。だから、お嬢さんが毎日聴いた曲は、大脳の奥深く刻まれて、人格の一部になってゐて、その曲に対しては特別の反応をするのだと思ひます。

だから、乳・幼児期には世界的な名曲を、それも立派な機器を通して聴かせる事が肝要なのです。安物の機器で音程の悪い音楽を聴いてゐれば音痴になるでせうし、

下品な音楽ばかり聴いてゐれば下品な音楽にしか反応しない人間になるに決ってゐます。それが本人の意志でさうなるのならそれも良いでせうが、さうでは無いのだから困るのです。

私は戦争中空軍将校でしたので、普通の将校の二倍近い給料を貰ってゐましたが、その大部分を音楽レコードの購入に当て、主にヨーロッパの古典音楽を集めました。ベートーヴェンの交響曲もこの時全部集めました。明日をも知れない毎日でしたから、今生の想ひ出に世界の名曲といふ名曲を存分に聴いてみたかったからでした。それで毎日夕食後、下宿で独り静かにこれを聴いたのです。

然し、それから四十五年経った今は、それらの曲よりも、琴や三味線や昔の流行歌を聴く方が心が和みます。私は若い頃、流行歌を軽蔑して歌ひもせず聴きもしませんでした。にも拘らず、不思議と東海林太郎や藤山一郎の歌が頭の中に貯へられてゐて、テレビでこれを聴くと、憶えてゐない筈の歌詞が自然と口を衝いて出て来るのです。青年時代に世界の名曲に憧れて随分聴いたものですが、それは脳の表面に刻まれただけで、幼年時代に脳の深層に刻まれた音楽に心は強く反応し惹かれるもののやうです。

■本当の教師は、学習者の心に火を点ける

未来の教育は、今よりも一段と機能の勝れた校舎に、勝れた教材・教具の完備した教室で行はれるやうになるでせうが、然し、教育の成否は結局「人に在る」のです。その最も好い例は松下村塾でせう。建物は狭隘（きょうあい）な茅屋（ぼうおく）で、教材は一般の経書（けいしょ）でしかありません。然も、松陰が村塾で教育に当った期間は僅かに二年半に過ぎません。その

村塾から明治維新の功労者が数多輩出したのです。

今、欧米の教育者たちの関心が日本の教育に注がれてゐますが、その主たるものが尊徳と並んでこの松陰です。松陰の人生は僅かに三十年に過ぎませんでした。だから、その知識や経験がいかに勝れたものであらうとも、万人に勝れてゐたとはとても考へられません。もっと豊富な知識や経験を有った人間は、当時の日本には多くゐたはずです。だから、「教育は人に在る」と言っても、それは「知識や経験の多寡に依るものでは無い」といふ事が解ります。

「普通の教師は、学習者に向ってただ教へる。優秀な教師は、学習者に解らせる。然し本当の教師とは、学習者の心に火を点ける者である」とは前述しましたが、これは、欧米の教育者たちの斉しく観る所、口にする所でもあります。

では「学習者の心に火を点ける教師」とはどういふ教師でせうか。それは自身が火と燃えてゐる教師の事でせう。それで、学習者が師の火の焔に熱せられて発火点にまで高められ、その心に火が点くのです。品川弥二郎は師の松陰について次のやうに語ってゐます。「楠公討死の件（くだり）を先生は涙を流しながら講義する。聞く者が十二、三歳の少年であっても、先生は必死に読み、講義したのであった」と。松陰は相手がどんなに年少の者であらうと決して手を抜きません。対等の者として扱ひ、全身全霊を傾けてその有てる総てを尽し、その心を揺さぶり続けたのです。

松陰は入獄した門弟に「獄中でも学問をしなくてはいけない。学問が足りないと、道理に明らかでない為に、笑って死ぬことが出来ない」といふ手紙を書き送ってゐます。松陰の言ふ“学問”とはそのやうな学問です。今の「入試に備へる為の学問」とは全く違ふのです。今のやうな学問では、教師は火と燃えるわけがありません。

■この世はあらゆる能力の人間を必要としてゐる

今の教育が良くないのは、その目指す学問がこのやうに低劣である事に由来します。小・中・高校では入試の為に勉強をしますが、大学に入ってしまへば忘れたやうに勉強しなくなります。大学に入るのは学問が目的ではなく、就職が目的だからです。また、その就職する目的も生き甲斐とする仕事に従事する事ではなくて、給料だけが目当てなのです。

「不義にして富み且貴きは、我においては浮雲の如し」とは孔子の言葉ですが、今の世は残念ながら富貴なる者の大方が不義を敢てしてそれを手に入れた者です。然し、その者とても、死に臨めば富貴が浮雲の如きものである事が解り、それを追ひ求めて来た自分の人生がいかに空しいものであったかを悟るに違ひありません。ですが、それでは遅過ぎますし、そのやうでは世の中がいつまで経っても良くならないのです。少年の間にこの事をよく理解させて置かなければいけないのです。それが、これからの教育の目指す学問でなければならない、と思ひます。

私は前に、教育とは「教へる」ことではなくて「自ら学び自ら習ふ」ことである、と述べました。私が小学校で学んだ時の国語の教科書に「三代の苦心」といふ文がありました。

「本居宣長の大著“古事記伝”は、契沖、賀茂真淵、宣長の三代に亘る研究の積み重ねの結果であった」といふものです。然し、宣長が師の真淵に会って直接教へを受けたのは、松坂におけるたった一夜の事でありました。あとは「自学自習」であの偉大な学問を大成させたのです。師との出会ひは、このやうにたった一夜でも火が点き、炎々と燃え盛るものである事が解ります。この本居宣長の事を思へば、「自ら学び自ら習ふ」志

さへあるなら、世の中に本当の教師の乏しい事を嘆く必要はありません。

さて、この世にはいろいろな種類の職業があって、それでうまく成立ってゐます。ですからある種の職業は高い学力を必要とするけれども、ある種の職業は学力よりも別の能力を必要としてゐます。ですから、総ての生徒が高い学力を身に着ける必要など全く無いのです。所が、今の学校教育はそれを目指してゐて、学習に失敗した子供を「落ちこぼれ」と呼んでゐます。

世の中に「落ちこぼれ」など有るわけが無いのです。この世はあらゆる能力の人間を必要としてゐるからです。ですから、落ちこぼれが有るとしたら、それは学力の有無に関係無くて働く意欲の有無に在ります。それは学力主義の教育を廃(や)めて、各人の能力に応じ、各人が好む事を存分にやれるやうに改めるだけで解決します。さうすれば誰もが、努力して仕事をする事の楽しさを知り、喜んで働くやうになるに違ひないからです。